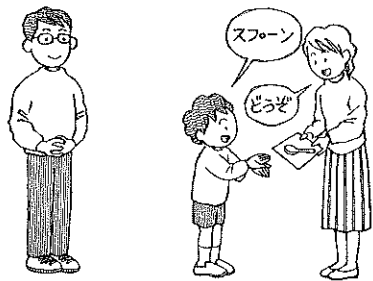


表現の力を育てる上

理解力の育ちと表出の関係

理解と表出、分かることと話すこととの関係は表裏一体です。もちろん、子どもは一人ひとり個性もさまざまですから、よく分かっているのに話せない子もいるし、意味は分かっているのに文を話す子もいます。コマージュの歌やセリフを話しているタイプですね。このようなタイプのお子さんは、中には「不快な時には、いつもこの歌を歌います」という方もいらっしゃると思います。多くは場面や意味とあまり関係なく自分のペースで、自分の楽しみ？として話しているようです。このため、必要な場面では話せないことも多く、生活する上ではうまく生かされない「話す力」です。一方、こ



ります。この時、絵カードが見えていると簡単に、隠しておくとより実際の生活場面に近い状況を作ることができます。

⑧先生は子どもから絵カードを受け取って、ねぎらい、再度「何をもらってきたの？」と絵カードを見せずに問います。

このように一連の流れで「模倣する」から「絵を見て物の名前を言う」→「相手に伝える」→「質問されて答える」ことを学習します。

①から⑧の中で、はじめの難関は、やはり⑤です。どうしても絵カードの枚数が多く覚えているられないので、少なめにしよう配慮しましょう。また、⑤で言ってもらうことを意識して、絵カードを選んだことを褒める時点で「そう！○○だね。○。じゃあもう一回。これは？」のように、言っただけのことばを強調しつつ模倣から自発話へ近づけていきます。

二.ほとんど言えることばがない子ども、言えることばがない子どもに対して、

ほうが、話せるようになるために有利であることが報告されています¹⁾。2)。発達的には、理解力の育ちが表出の力を育てていると言えそうです。

指導の工夫

1. 言えることばがある子ども
大人の言った単語を聞いてまね・模倣ができるお子さんには、「模倣」から「自分で思いついて言える」(自発話と言います)経路を誘導しようと試みます。コマージュの歌やセリフなら話しているというお子さんも、模倣ができるようなら同じような手続が可能で「理解を広げつつ、理解できていくことばを話す」ことを目指していますので、理解と表出はペアにして課題を設定します。
2. 子どもに見せ、「これ、なーに？」と表

出を促します。

3. 言えない、違うことを言う時には、模倣するよう誘います。
4. 全ての絵カードについて言ってもらったら、机に絵カードを並べて「○○はどれ？」と言って子どもに絵カードを選んでもらいます。
5. 絵カードを選んだことを褒めて、再度「これ、なんだっけ？」と問います。
絵カードを選ぶためにその言葉を聞いた直後ですから、②の時より少しだけ表出しやすい状況ですよ。
6. ②か⑤で言えた絵カードを使って、買い物ごっこをしてみます。同じ絵のカードが二枚ずつあると便利です。先生が絵カードを見せて「○○もらってきて。」とお願いします。
7. 子どもは、二メートルくらい離れた所にいる保護者のところへ行って、「○○」と伝え、カードをもらって元の場所に戻

課題の手続きは同じです。しかし、「どんな単語を準備するか」に、より配慮が必要

です。「言えることばがない」ということは、たとえば「はさみ」であれば、「はさ」や「み」という音を組み合わせさせて模倣することが難しいのではないかと思います。このため、指導に用いる語を選ぶ際に、言えそうな音、模倣しやすい音を含む単語を選びます。具体的に言えば、「あいうえお」や「パ、バ、マ行」、「フ」などです。これらの音は、舌を使わずに(いえ、正確には用いるのですが)、口の形や唇を用いて音を出すことができますので、見て模倣しやすいという利点があります。私がよく使うのは、「パン」「スプーン」「ふうせん」「プップー(車)」「いす」「ぶた」「パンツ」などです。子どもにとって身近な物を中心に選んだほうが、言えるようになった時にすぐ家庭で使えますよ。

大切なことは、「正確でなくていい」「音だけでいい」ということです。「スプーン」なら「す」「ぶ」「ん」とすべて言える必要はありません。言いやすい「ぶ」だけでオーケーです。自分から言えそうな音は、どんな家庭でも使ってもらおうようお願いしていきます。

三. 音を模倣すること自体が難しい子ども

「パ」や「ブ」「フ」がいくら言いやすいとはいえず、音を模倣すること自体がうまくできない子どもにしてみれば、「できないものはできない」。そんな時は、音をまねするという固定観念から抜け出して、音を出す時の動きを誘導してみます。「パ」や「マ」なら口唇の開け閉めを繰り返す、「ブ」ならいわゆる「あっぱっぷ」でほほを膨らませてもらい、膨らんだほほを指で押して音を出す、「フ」なら細長く切ったティッシュを吹いてもらう、などです。これら「音と言っただけの音」微妙な音・動きを「言っている」と評価して、どんどん日常的にも使わせていきます。

話せるようになってほしい、という親の願いは切実です。しかし、「話してごらん」と言われても話せるわけはありません。理解力という土台をしっかりと作りつつ、どんな模倣ならできるのかを知ること、不完全な発話を認めることが大切なことだと思います。

1) 秋元淳子他「S.S.法 症状分類」移行群(単語の受容が可能で音声発音不可)の状態を示す言語発達遅滞児の経過について」1996 『言語聴覚療法』11 163-174
2) 小寺富子「言語発達遅滞の言語治療」診断と治療社 1998

表現の力を育てる 下

伝えようとする意欲を育てる

いくら表現できる力を有していても、相手に伝えるつもりも必要性もなければ、結局話すことはひとりごとばかりとなってしまいかねません。ことを生活の中で学んでいくことができるお子さんであれば、自分の欲求と成功経験とが一致していく中で「自分から要求する」ことを身につけていくのでしようが、そもそも人への意識や自発性に乏しいタイプのお子さんにとっては、「生活の中で自然に学ぶ」こと自体が高いハードルとなってしまいます。学習目標も学習手段も難しく、どうしてよいか分からない状態に陥ってしまうのではないのでしょうか。

気持ち・感情は「こう思いなさい」と示されたところで「はい、そうですね」と学べるものではありません。しかし、気持ち「膳」にしてしまうのではなく、お子さんが食卓に着いてから「食べる」と要求する機会を作ることもできます。気をつけていただきたいことは、やりすぎないことです。ひと粒食べるごとに「ください」では、どんどん欲しくなくなるだけです。

二、自分の欲しいものだけに、強く要求するタイプ

「意欲」は示しているお子さんです。ただし、かなり限定的。特定のこと以外には関心が薄いので日常的にみていると要求は少ないと感じるタイプかもしれません。とはいえ、要求できます。課題設定の考え方としては、深めることと広げること、どちらかの方に偏らず両方を促す機会を作るよう心がけます。広げるとい意味では、要求する対象や人を広げる課題、深めるとい意味では、伝わらなかったらもう一度言うなどの課題が考えられます。

要求する対象物が限定的であるといった場合に、最も多く見られる対象は食べものでしょう。食べものから何に広げていくか考えてみると、やはり食べものと関係の深いものを選ぶこととなります。コップやスプーンといった食べる際に必要な道具が代表的です。ジュースなどをお子さんが要求した際に、ちよつといじわるしてコップは

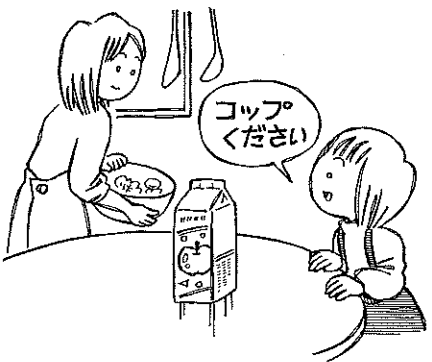
が育ってくるのをじつと待ってはかりはいられません。先に行動を学習してもらい、気持ちが伴ってくるのを促してみるのはいかがでしょうか？

お子さんのタイプと課題の設定

「相手に伝える」ことを目的とした課題は話せないと無理、と決めつける必要はありません。どんな手段でも、その時点でお子さんが使える手段を用いて、伝える経験を積んでいくことが大切です。お子さんのタイプごとに、指導の際の学習課題と家庭でできる場面づくりを考えてみましょう。

一、自分から人にかかわっていくことが少ないタイプ

ことばが出ていないお子さんであれば、前回五月号で紹介した一連の表出課題の中のお買い物ごっこが有効です。「絵カード



準備せず、飲む直前にコップを要求してもらうようにしてみます。

伝わらなかったらもう一度言う、という行動は人との関わりの中でとても大切です。ことばは「発する」ことより「伝わる」ことが重要であると経験を通して教えていきましょう。「ごめんね、もう一回言ってみて」を促してみてください。これも、やりすぎないことが大切です。

三、話せないお子さんの場合

まだことばが出ていないお子さんでも、身ぶりや写真を使うことで、「伝えることの便利さ」を経験できます。というよりも、話せるようになるまで人に要求する機会がないことのほうが大問題です。勝手に持つ

てくるといった直接的な行動でなく、相手に伝えて要求をかなえてもらうという機会を早くから経験させていきましょう。

「ちょうだい」をする、抱っこをせがむといった要求が促しやすいいと思います。「ちょうだい」の身ぶりは、できれば手のひらが上に向く形で教えたほうがよいでしょう。これは、先々いろいろな身ぶりを覚え、使っていく上で区別がしやすいというメリットがあります。お子さんが欲しいものを、大人の顔の前、つまりお子さんから見るとやや高い位置に出すようにしてみてください。お子さんは、ものを受け取るうとして手のひらを上に向けて差し出しやすいと思います。まねをさせる、介助するばかりでなく、行動を誘発することも大切なテクニクです。抱っこは、少し離れた場所です大人が、さあ抱っこするよといった感じで両腕を差し出してあげると、子どもも抱っこされやすいよう両腕を差し出して近づいてきます。これを抱っここの身ぶりと認めていきます。

今回の結論。意欲など気持ちは育つのを待つだけでなく、積極的に要求する行動を経験させる中ではぐくんできていくこと。機会は工夫次第でたくさん作れます。でも、やりすぎは禁物。話せなくても大丈夫。